

第1部 公共空間の信用 先史と古代の金融

2020年4月27日・5月11日：古代ギリシャと古代ローマの金融
公開から密室へ
集団から個人へ

名古屋大学 経済学研究科 齊藤 誠

4月20日までのチャットにあった質問

- 今のようなお金でのものの売買が現れるまでずっと様々なものが貨幣の役割を果たし、物々交換が行われていたのですか？
- なぜ高校などの学校の教科書では物々交換が不便であるから貨幣が生まれた説が主流になっているのか？
- すでに先生が言及されていたのであれば申し訳ありませんが、債権者が転々とする取引だけではなく、債務者が転々とする取引も存在したのでしょうか？
 - 債務者が交替すれば、割符はどうなりますか？？？

古代ギリシャ・ローマの金融の風景

- **現代の金融の風景とはまるで違う！**
 - **今週、来週は**：「**集団対集団の取引**」に対する「**個人対個人の取引**」
 - **先週、今週も**：「**取引の秘儀性・密室性**」に対する「**取引の儀礼性・公開性**」
 - **先週**：「**見知らぬ者同士の交換**」に対する「**知った者同士の交換**」
 - **今週**：先週は、「**貨幣を介した取引**」に対する「**信用を介した取引**」だったけど、今週のギリシャの金融は、「**信用を介した取引**」に対する「**貨幣を介した取引**」について
- **今週も**：ローマでも、モノとヒトとの関わりが全然違う！

古代ギリシャの金融： 琥珀金貨の誕生を通じて

ギリシャの金融を通じて学びたいこと

- 人類史において通貨が革命的な影響を及ぼした3つの契機
 - ① 紀元前7世紀、リディアにおける硬貨の誕生
 - ② 18世紀初頭までに生まれた預金通貨(中央銀行券を含む)
 - ③ 21世紀に生まれた暗号通貨
- 文学と経済
 - ① リディアの琥珀金貨とギュゲスの物語
 - ② 紙幣とゲーテのファウスト
 - ③ 暗号通貨の物語は？(おそらくは、ハイエクの貨幣発行自由化論)
- なぜ、鑄貨(硬貨)の誕生で**社会が動揺**したのであろうか？

鑄貨は、財政取引や経済取引を公的な空間から私的な空間に移行する契機となったのかも...

- 公的な空間

- 政治の場：壁のない建物、人々が集う広場、神殿、野外劇場、野外競技場
- 経済の場：証人がいる広場（都市）

- 私的な空間

- 政治の場：密室
- 経済の場：証人がいないところでそっと...（すべてが私的情報に）

割符（債務証書の記号）の意味を復習しよう。

- 1つを2つ（対）に割って、再び1つに戻す。
 - 一方が他方を意味する。
 - 割符と言語のアナロジー。
- 割符の発行者（債務者）⇒最初の債権者⇒債権者2⇒債権者3⇒・・・⇒最後の債権者⇒割符の発行者
- 誰が債務者（割符の発行者）なのか、誰が最初の貸し手なのか、あたかも、共同体が共通帳簿のように理解している。
- 債権者は、割符の向こうにある債務者を常に想定できた。

「おカネ」の暫定的な出発点をリディアで紀元前7世紀に鑄造された**エレクトロン貨**(琥珀金貨)としてみよう。

- どこで? : リディア
(トルコ領、アナトリア半島)
- いつ? : 紀元前7世紀
- だれが発行? : 国家
- どのような? : 金と銀の合金であるエレクトロン(琥珀金)から

エレクトロン貨を発行した リディアの僭主ギュゲスの2つの物語

- ガンダウレスの妻の裸体を盗み見するギュゲス
 - ヘロドトスの『歴史』から。
- ギュゲスの指輪
 - プラトンの『国家』から。
 - この指輪は、玉受けを内側に回すと、周囲から姿が見えなくなり、外側に向ければ見えるようになる。

ヘロドトスのギュゲスの物語

- 「リュディア王カンダウレスは愛する妃こそ世界一の美女であると信じ、近習の中で最も偏愛するギュゲスに向かって常々その美を吹聴していたが、ついには、「人間の耳は目よりも疑りぶかいから」とて彼に妃の裸の姿を覗き見ることを強要する。ギュゲスは「女(人妻)というものは下着と共に恥じらいの心をも脱ぎすてる」ものだし、「己のものを見よ」という教えもあるから、とこれを固辞するが、拒みきれずに**扉の蔭から妃の脱衣のさまを見る**ことになる。妃はしかし、扉の後から室外に逃げ出ようとするギュゲスに気づき、それが夫の企みであることを悟って、声はたてずに夫への復讐を思う。彼女は翌朝ギュゲスを呼び寄せると、カンダウレスを殺すか自分が死ぬかの二者択一を迫り、そして、夫が自分の裸身を覗かせた**その同じ場所から夫を殺せ**と命じる。こうしてギュゲスは王妃と王位を手に入れたが、デルポイの神託によって王位継承のことは認められたものの、五代目の子孫(クロイソス)にヘラクレス家(カンダウレスの系統)の報復が下ることも告げられた」
- 今村仁司. 貨幣とは何だろうか (ちくま新書) (Kindle の位置No.2291-2300). . Kindle 版.

プラトンのギュゲスの物語

- 「リュディア人ギュゲスの先祖(同名のギュゲス)は王の羊飼であったが、ある時、大雨と地震の後にできた大地の裂け目に降り、青銅の中空の馬を見つけた。その中に横たえられた巨大な屍体の指から黄金の指輪を抜きとって自分の指にはめてみたが、**輪金を内側に回すと自分の姿が見えなくなり、外側に回すと再び姿が見える**ようになった。指輪の魔力に気づいたギュゲスは王の許へ参上する使者となり、王妃と通じたのち共謀して王を弑し、王権を手に入れた」
- 今村仁司. 貨幣とは何だろうか (ちくま新書) (Kindle の位置No.2301-2305). . Kindle 版.

「他人から姿が見える状態」と「他人から姿が見えない状態」

- Marc Shell, *The Economy of Literature*によると、これらの物語は、エレクトロン貨という鑄貨が社会にもたらした衝撃を暗喩しているという。
- 「見えるもの」と「見えないもの」の対立
 - 見える権力(王)と見えない権力(僭主)
 - 見える取引(証人と割符を伴う取引)と見えない取引(鑄貨を用いた取引)
 - デュゲスの鑄貨＝デュゲスの指輪
 - (視覚だけでなく聴覚も重要...)聞こえる言葉(大きな声で発せられた口上)と聞こえない言葉(小さな声で発せられた密談)
 - 先史や古代は、公に発せられた言葉自体が政治であった時代。
 - 経済の政治からの離脱のはじまり

どうしてヒトはおカネを受け取るのでしょうか？

鋳貨の価値の源が見えなくなった・・・

- 割符の価値の源泉：債務者の返済能力
 - 将来、債務者が返済することを担保に割符に現在価値が生じた。
- 鋳貨の場合、地金価値なのだろうか？
 - 鋳貨の額面は、ほとんどの場合、地金価値を上回った。
- それでは、将来、誰かが鋳貨を受け取ってくれるとみんなが信じているので、現在の鋳貨に価値が生じたのでしょうか？
 - すでに鋳貨が流通している状態であれば、このロジックは妥当するかもしれないが、「初めての鋳貨」には適用しづらい。

国が発行し、国がまずは使用し、国が最後に回収する。

- 国が最終的に鑄貨を受け取ることが予想できたので、人々は、鑄貨を価値あるものとして受け入れた。
- 国が鑄貨を発行した。
 - ⇒ 国が財政活動(とりわけ傭兵への支払、市民への配分)に鑄貨を使用した。
 - ⇒ 国は、税金や罰金を鑄貨で支払うことを人々に義務付けた。
- 国が**通貨の発行と回収のサイクル**を構築したがゆえに、鑄貨に価値が生じた。
- しかし、貨幣国定主義とは異なり、貨幣の一部は貴金属の価値に依拠した。
 - 古代鑄貨は、信用が重要な要素だったが、すべてではなかった。
 - 地金信仰
 - 実際的には、鑄貨コストを高めて、贋貨発行を防ぐ。

エレクトロン貨（琥珀金貨）の場合

- エレクトロンの鉱石は、金銀の含有比率がまちまちで、当時の技術では、含有比率を計測することができなかつたうえに、金と銀を分離することもできなかつた。
 - 非常に使い勝手の悪い金属であった。硬貨に使うしかなかった...
- そこで、リディアは、エレクトロンから鑄造した硬貨に対して、原石価値を明らかに上回る価値を任意に設定するとともに、税金、罰金、関税の支払にエレクトロン貨を用いることを人々に義務付けた。
 - その結果、エレクトロン貨の流通は、リディア領に限られた。
- ただし、鑄貨の価値は、その地金価値を上回るとはいえ、地金で作られている必要があつた。⇒信用だけでは補えない部分
 - 偽鑄の予防

鑄貨(硬貨)が社会にもたらした不安(その1)

- 社会的な分配(国家による給付)が見えづらくなかった...
 - かつては、鉄串に肉を刺して獲物や生贄(保存がきかないうえに、分量が明らか)を均しく分けていた。
 - しかし、おカネで配ると、権力者の恣意が入り込むようになった。
 - 富を蓄えられるようになった。
- 経済にかかわる口上が公の空間から消えてしまった...
 - 言葉が政治だった時代、経済が徐々に政治から分離し始めた。
- 取引が見えづらくなかった...
 - 鑄貨によって即時に決済が可能となると、割符のように将来の債務履行の規律を保つために公共空間で証人を立てる必要がなくなった。
 - 中世後期になると、おカネを用いない貸借取引(割符を用いた取引)でも、証人がいなくなってしまう。

鑄貨(硬貨)が社会にもたらした不安(その2)

- 蓄えた富が見えなくなった...
 - おカネが富となった。
 - 見せびらかす富から、隠す富へ。
 - 際限のない富の蓄積の契機となった。
- ヒトとモノとの関係が流動的になった...
 - その結果、ヒトと(ヒトに近い)モノとの固い結びつきで成立していた社会秩序が大きく変化した...
 - 古い“家族”の解体
 - 奴隷制度の拡大
 - 土地や奴隷などの生産要素の少数の権力者への集中
 - 不平等を生み出す契機となった。
 - ポトラッチがなくなった...

鑄貨(硬貨)が社会にもたらした可能性

- しかし、新しい社会の誕生の契機にもなった。
 - 鑄貨の発行と回収のシステムによって、国家の大規模な財政活動を支えた。
 - 要するに、**国家が大戦争をできるようになった。**
 - 生産要素が“家族”に集中していた状態から、より効率的な資源配分が潜在的には可能となった。(ただし、従来の社会秩序を大きく壊した)
 - 人間間の利害対立を、貨幣によって評価し、法的な解決を可能にする土壌を形成した。
 - 復讐から、貨幣による償いへ(古代硬貨が原始貨幣から引き継いだ部分)
- その後、中世を経て近代には、**信用を基軸とする貸借**(割符の発展形)と、**鑄貨を基軸とする貨幣**が金融の両輪となっていく。
 - 銀行券(中央銀行券を含む)は、信用を基軸とする貸借の一種。
 - 同時に、金本位制のもとでは、中央銀行券が金地金の価値に裏付けられた。

古代ローマの金融：

- (1) 集団から個人へ
- (2) 所有権の誕生

おそらく、来週に積み残しになります。ごめんなさい。🙇

木庭顕『新版ローマ法案内』を読もう！

- なかなか手ごわい本ですが、3つの章を読んでいきましょう。
 - 第2章 民法の原点
 - 第3章 契約法の基本原則（おそらくは、第3章と第4章は、5月19日へ）
 - 第4章 所有権概念の登場とその帰結
- いくつかのポイント
 - 集団から個人へ
 - 個人を主体とする取引
 - 占有と所有
 - ローマ法が近代所有権の基礎といわれるが...

古代ローマにおける儀礼

- 都市と領域(農場)

- 都市

- 公式性: 独立した個人間の対等な議論を通じて一義的な政治決定を行う場
 - 公開性: 透明性を確保した取引の場(都市の倉庫と農場の倉庫の比較)
 - 儀礼の場としての都市: 議会(民会)、行政(元老院)、司法(法廷)

- 領域

- 集団が権力関係をもって生産活動を行う場

- 二重分節

- (領域自治) 領域における個人の自由を保障する領域の第二次的結合体
 - (都市政治) 領域からの個人の自由を保障する都市の政治システム

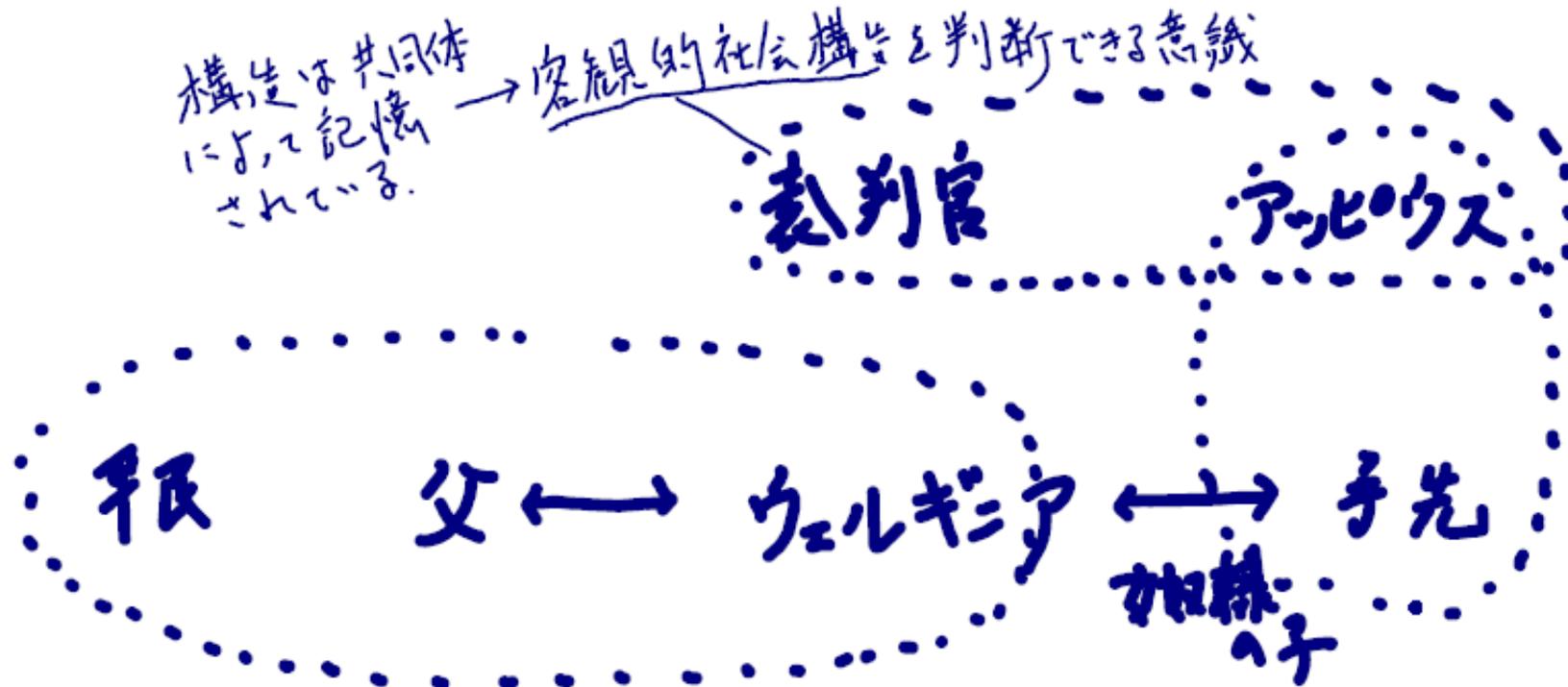
4月28日の講義：証人に見守られた取引風景

- 古代ローマの取引儀式（**マンキパティオ**、握取行為）
 - 法的な形式主義ということそのことが、物の重要性を証している。ローマ市民法においては、財の引渡は日常的なことでも世俗的なことでも単純なことでもなかった（重要な財は奴隷と家畜であり、のちになってこれに不動産が加わった）。**引渡は常に儀礼的な方式**に則っておこなわれ、相互的であった。そして、**依然として集団的におこなわれていた**。**五人の証人**がおり、あるいは少なくとも**五人の友人**がいて、それに加えて**「秤持ち」**がいた。わたしたちが引渡を捉えるときには、純粹に法的に、また純粹に経済的に捉えるけれども、そのような近代的な諸観念とは無縁のさまざまな観念が引渡に絡まっているのである。
 - 『贈与論』、312頁。

ローマ法における占有とその移転

- 占有概念の相対性
 - 占有の認定は、あくまで、あるモノについて、あるヒトとそのモノとの関係と、他のヒトとそのモノとの関係の強さで共同体が決定している。
- 所有概念の絶対性
 - 所有の認定は、あるヒトとモノとの関係を、それ自体として法制度が担保している。

ウェルキニア伝承：裁判による占有の認定（板書）

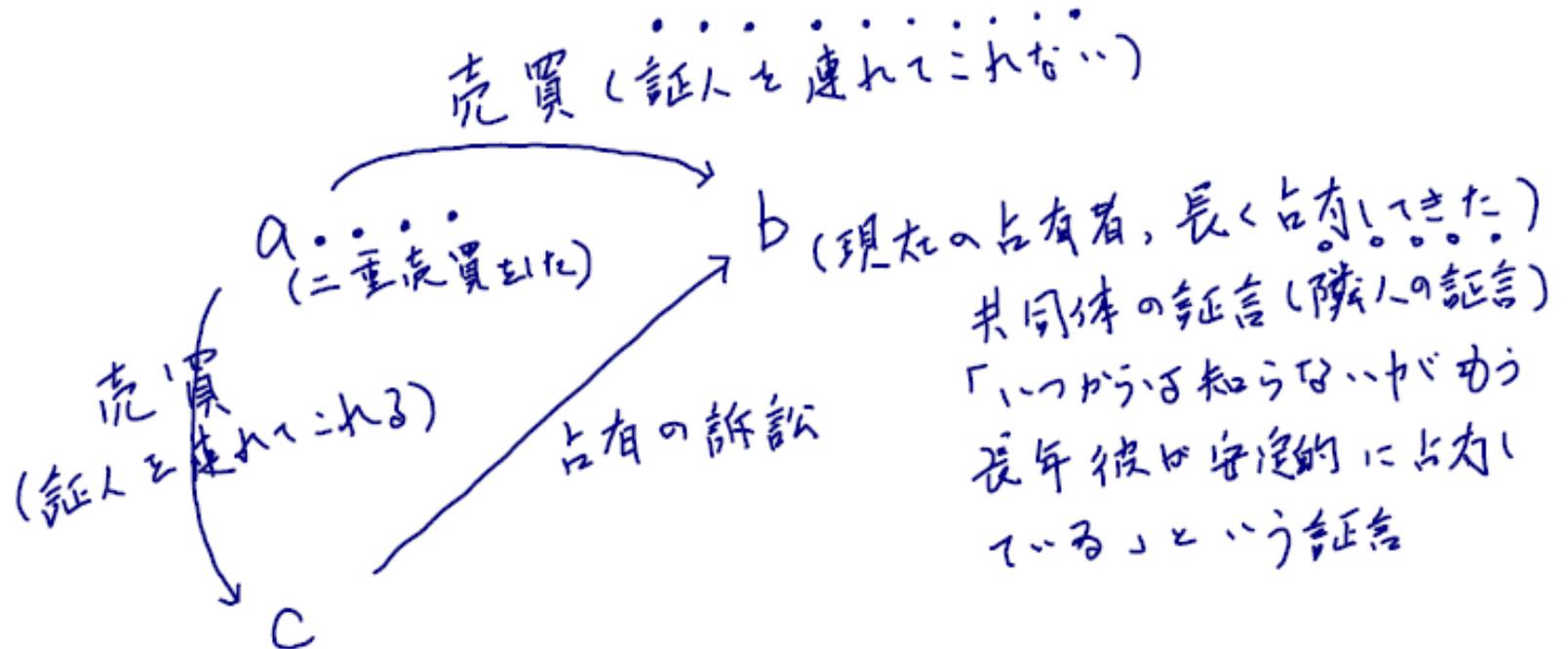


を断ち切る → 個人の誕生

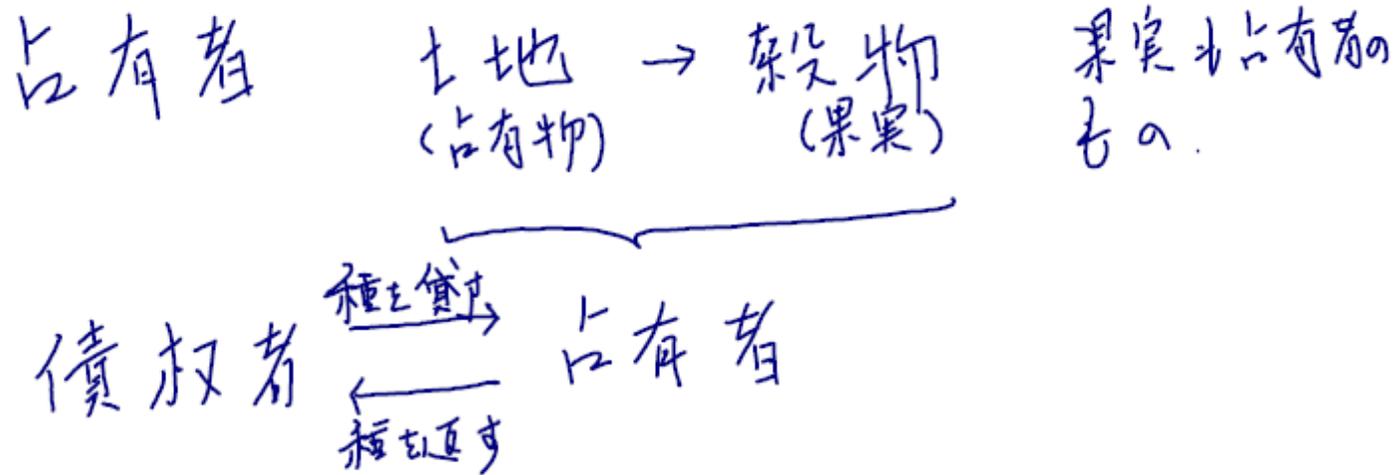
占有の移転と時効取得(板書)

占有の移転と時効取得(板書)

たとえばマンキハテオの証人たちが
aやcに買収された!



消費貸借への禁欲(板書)



ローマ法の原則 (占有を守る)

• 債権者は占有者でなく占有者は債権者でな..

• 利子の禁止

• 元と文返せなくて..

{ 債権者団の結成 (新大正政治システム)
債権者衆の禁止
包括執行

債務奴隷の廃止：債権者と占有者の区別（板書）

BC 326 ポテリウス・パピリウス法
市民の債務奴隷化の禁止

債務返済が妨げられなくて

◎ 債権者個人が人としての地をのみこま
ことを許さな...

◎ 債務者に帰属する「物」は「ティベリウスの河に」
売りとばす → 債権者たちは金銭だけを受け取る。
木庭先生は、ここに貨幣の誕生の契機を
見ている。

39

ローマ法に見られる経済取引への禁欲：5月18日の予告

- 独立した個人の間**の信義誠実の原則** (bona fides, ボナ・フィデース)
- 経済取引への禁欲
 - 売買
 - 委任
 - 預託・銀行
- **所有権**概念の誕生
 - 所有権に基づく信用